

氏 名：比留間 絵 美
学 位 の 種 類：博士（看護学）
報 告 番 号：甲第113号
学 位 記 番 号：博第110号
学位授与年月日：令和5年3月15日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目：急性期病院における認知障害のある高齢者への看護師の関わり
Nurses' Care for Older Adults with Cognitive Impairment in an Acute Hospital
論 文 審 査 員：主査 江 本 リ ナ
副査 坂 口 千 鶴（正研究指導教員）
副査 小 宮 敬 子（副研究指導教員）
副査 守 田 美奈子
副査 三 浦 英 恵

論文審査の結果の要旨

審査の概要

日本の高齢者人口の増加に伴い認知症患者数も増加し、2025年には高齢者の5人に1人が認知症になると予測され、身体疾患のため急性期病院に入院する認知障害のある高齢者の急増も見込まれる。一方で、治療が優先される急性期病院において、入院による不確かさや不快感を体験し不安が大きい認知障害のある高齢者と、常に意思疎通を図りながら看護を提供することに難しさがあるのが現状である。

本研究は、急性期病院における認知障害のある高齢者に看護師がどのように関わっているかを明らかにすることを目的に、急性期病院の2つの一般病棟にて、計看護師20名と認知障害のある高齢者16名の協力のもとフィールドワークを用いた質的記述的研究を行った。分析結果より、急性期病院の看護師は、多忙な日々の治療やケアの中でも、認知障害のレベルに応じて、高齢者が身の回りの出来事を理解して落ち着きを取り戻し、可能な限り自分の意思や能力を活かすことができるよう懸命に関わっていたという重要な特徴が見出された。また、高齢者の認知機能の低下に加え緊急性の高い事態が生じることによって、看護師は高齢者を周囲の環境へとつなぐ関わりが難しく精神的に疲弊することもあったが、高齢者を看護師等スタッフ皆で看することで、高齢者だけでなく病棟内での看護師同士のつながりを支えることになり、高齢者を周囲の環境へとつなぐ関わりを促すことにも大きく影響していることが見出された。

審査の結果、本研究は、治療優先の急性期病院における認知障害のある高齢者へのケアの限界や課題を浮き彫りにしつつ、それに対応する看護の役割を見出した点において高く評価された。特に、本研究の特徴である、認知障害のある高齢者自身と周囲の環境とのつながり、認知障害のある高齢者を「みんなで看る」看護師同士のつながりは、これまで明らかにされてこなかった急性期病院における「つながり」を軸にした看護の姿を示すものである。また、1年3ヶ月という長期間に渡るフィールドワークを通して、厚みのあるデータ収集を行い、非常に丁寧で詳細な場面の記述によって、看護師の関わりが臨場感をもってありありと描写されている点も高く評価された。

本研究で得られた知見は、今後、急性期病院で急増することが予測される認知障害のある高齢者への看護に活かされ、チームで看る看護の質向上につながると高く評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。